

日曜地質巡検会記事

第68回(昭和47年11月19日)

針尾島(葉山～西海橋)

(2万5千分の1 川棚)

阪口和則(佐世保南高)

針尾島葉山バス停10時集合。

集合場所で石井副会長から挨拶がある。その後、1万分の1の地形図を配布し、コースの説明と今日の問題点の指摘を行なった。

今日の問題点及び要点は次の通りである。

①東免砂礫層ひかしめんとしていたもの(阪口・迎1969)が、面高礫岩(野田光雄・牟田邦彦1957)と区別できるか。

②東免砂礫層の一部に層状を呈する砂質の部分があるが、これはその下位の第三系のものではないだろうか。

③西海凝灰角礫岩の産状。

④段丘礫層の観察。

⑤明星の鼻みょうじょうのサヌカイトの産状と採集。

この地域は筆者等が数年前から調査を続けている地域で、前述の通り東免砂礫層としていたものが、本当に西彼杵半島北部一帯に広く分布する面高礫岩と区別できるものかどうか、その決定的な場所を見出すことができずに現在疑問点の1つとして残しているところである。これについて参会者に御検討願えることは非常に嬉しいことであった。

集合場所である葉山バス停から400m程南へ針尾送信所へまっすぐ通じる道を下ると、玄武岩と東免砂礫層との不整合を見ることができる(①)。

玄武岩は玉ねぎ状構造のよく発達している紫蘇輝石を斑晶に岩む玄武岩である。鎌田先生からは同行した佐世保南高生徒に対して玉ねぎ状構造の

成因、その特徴等についてくわしい説明があった。

東免砂礫層はチャート、砂岩、玄武岩等の円礫が白色の砂質のマトリックスで固められているが、固結度はあまり良くない。

その地点から西へ100mばかりのミカン畑に従来第三系の砂岩とされている層状を呈する砂岩が見える(②)。

筆者等はこれは東免砂礫層の一部であると考えている。非常に判断に苦しむ場所である。それから200mばかり送信所へ向う道を南へ下った地点ではかなり風化の進んだ段丘礫層が見える(③)。安山岩礫を主とし玄武岩、石英、チャート等が多く見える。風化がはげしいので試料採集には不向きである。

その地点の近くには(④)こぶし大位の黒曜石の転石が多く見つかる。たぶんこの段丘礫層の中のものであろう。又、サヌカイトが1つ見つかったのは興味あることである。

このあたり一帯は非常にミカン畑の多いところで、ミカンの出荷が行なわれていた。

それからミカン畑をぬって国道へ出た、高畑たかはたである。国道ぞいに玄武岩の露頭があり(⑤)新鮮なサンプルがとれる。これは①の地点で東免砂礫層を不整合におおっていた玄武岩と同質のものである。

さらに500m程国道を南下すると、モーテルが最近つくられている。その入口付近で、粗粒灰色でゼノリスを多く含む玄武岩が見られる(⑥)。

一部に板状節理が見える。やや様子の変わった玄武岩である。

現地で、用意してきたプレパラートを簡易偏光顕微鏡でのぞいてもらった。プレパラートの中には融食された石英の捕かく結晶が見える。この付近に見られるこの玄武岩を総称して葉山玄武岩と名づけている。

国道をさらに南へ300m程いくと、東免砂礫層の模式地である(⑦)。上部にクロスラミナのみえる白色の凝灰質礫質砂岩が見える、その下位には円礫の層がある。

西彼杵半島の面高礫岩とはマトリックスが非常に白っぽいところがちがっている。又礫の中に花こう岩、流紋岩などの円礫もみつかるところがある。

ここにも一部に第三系に似た砂質の層が見える。この中からサツマイモ状の団塊を採集したことがある。

この砂礫層の分布は国道ぞいに400m程見え1つの谷を境にして突然西海凝灰角礫岩にかわる。この境界が見つければいつも思う。

そのあたりから、そろそろ空腹をおぼえ、まっすぐに名倉の浜までかけおいた。名倉では真珠の養殖が行なわれている。今日は日曜日のためか人影があまりなく静かである。浜は典型的な西海凝灰角礫岩で海蝕崖や海蝕台がみえる(⑧)。

昼食は網干場の上でとった。青い海、ゴツゴツした崖、向うには西彼半島の一部が見え、実に美しい。

昼食後、ミーティングがあった。自己紹介、事務局からの連絡、“長崎県の地学”の三訂版についての説明がある。又、佐世保南高生徒の参加者は、この実習に20点がかかっていることを筆者から紹介した。

午後は田ノ上^{たうえ}を通して再び国道へ出た。途中西海凝灰角礫岩中に2m×1.5m程の砂岩の大礫が混在しているのを見た(⑨)。これは一体どういことだろう。

田ノ上付近では安山岩の溶岩が見える。これは西海凝灰角礫岩としているものの一部であろう。分布地域の各所でそのような部分が見られる。複輝石安山岩である。

国道へ出たところは土産品店が多く並んでいる西海橋東口バス停に近い。そこから国道を100m程北へ行くと段丘礫層が見える(⑩)。ほとんど風化されて1つ1つの礫も中までくさされている。安山岩を主とし、玄武岩、砂岩、チャート、石英、黒曜石などが見られる。

それから駐車所の横を通して明星の鼻へ直行した。途中、西海橋ビューロジ付近では板状節理の発達した溶岩が見える(⑪)。これは、サヌカイトと関係のある古銅輝石安山岩である。

西海橋付近の安山岩は非常にちみつで黒く玄武岩によく似ている。又一部にはかんらん石を含むものも見られ、板状、柱状の節理が良く発達している。玄武岩——安山岩質溶岩(山口勝, 1964)とされているもので、西海橋の橋脚をつくるものがそれである。

明星の鼻では古銅輝石安山岩の板状節理のよく発達した溶岩があり、その中に脈状に真黒なサヌカイトが見える(⑫)。その部分だけで長さ南北に約20m、厚さ(幅)2m程である。この産状についてのくわしいことは筆者にはまだ良くわかっていない。

そこで佐世保南高の生徒は走向、傾斜のはかりかたの実習を行なった。そのうち、あちこちからサヌカイトの澄んだ金属音が聞こえ、大きな合奏になった。

そのあと西海橋県営駐車場の芝生の上で本日のまとめを行ない、解散した。盛会であった。

参加者 26名(正会員・一般 16名、学生・生徒 10名)